はじめに

筆者は2004年に西日本法規出版（現･ふくろう出版）から『間主観カウンセリング―「生きがい」の心理学』という本を出しました。同書は大学の授業でも教科書として使用しておりましたが、その際、再三にわたって関連重要人物として「三谷隆正先生」について学生に紹介しました。

学生の中には、筆者の同書よりも「三谷先生についての話が面白い」と言う人がかなりおりまして、授業の準備のために、三谷先生の著作を何度も何度も読み返している内に、三谷先生についての本を出版できないかと考えるようになりました。筆者の恩師、伊藤隆二先生（横浜市立大学名誉教授）に、上のことを申し上げると、「是非おやりなさい。私も尊敬する先生ですから」とすぐに賛同してくださいました。この伊藤先生は東京大学教育学部のご出身で、三谷先生同様、キリスト者であられる臨床教育心理学者です。

また、臨床心理学を専攻する筆者がなぜ三谷隆正先生について書くかということですが、日頃のカウンセリング実践の中での気づきによります。その気づきとは、来談者の問題性や病理性ばかりを問題にする前に、カウンセラー自身が如何に生きているのか、自問自答する必要性があるということです。

カウンセリングの場で如何に善いことを言っても、日頃の生活においてカウンセラー自身が善く生きていなければ、それは来談

者に対して何ら善い効果をもたらさない、つまり、裏表がない一人の人間として来談者と正直にかかわらなければ、来談者およびカウンセラーの治癒への力動は起こりえないとカウンセリング実践の場を通じて確信できたからです。

そのような気づきから、何らかのヒントが得られないかと、さまざまな人生論・生きがい論・幸福論を読み進めましたが、三谷先生を心の師と仰ぐ神谷美恵子先生の『生きがいについて』（みすず書房）を例外として、三谷隆正『幸福論』を超えるインパクトがあったものはありませんでした。

同書は「人間の幸福とは」といったことを哲学の立場から論じたものでした。筆者は、同書および著者の三谷隆正先生の生き方から多くのものを学びました。そして、せめてものご恩返しとして、「人間性心理学」（「人間とは何か」「人間の本質とは何か」などを心理学の立場から探究する学問）の視点から、再度、検討・考察し、一冊の本として上梓（じょうし）しようと思いました。

そのようにして、本書の執筆を考えたのですが、初稿はあまりにもアカデミックなものになりすぎたため、全面的に書き直して、高校生くらいの読者から理解できるような内容にいたしました。そして特に力を入れて書いたのは、三谷隆正の幸福論が、机上の空論なのではなく、三谷隆正の艱難辛苦（かんなんしんく）の人生を通じた「真実の思想」であるという点です。

なお、最後になりましたが、本書出版の機会を与えてくださった大学教育出版の方々に心より御礼申し上げます。

2014年1月

鶴田一郎

人間性心理学の視点から三谷隆正『幸福論』を読む

目　次

はじめに…… 1

第１章　三谷隆正の思想と行動
　—「信仰—学問—教育」に生きた生涯から— …… 7
はじめに—問題の所在　7
1. 三谷隆正の生涯　9
　1−1　三谷隆正の略歴　9
　1−2　三谷隆正の生涯　17
2. 三谷隆正の思想と行動　27
おわりに—まとめにかえて　32

第２章　三谷隆正と三人の師
　—内村鑑三・新渡戸稲造・岩元禎— …… 37
はじめに—問題の所在　37
1. 三谷隆正と三人の師　39
　1−1　内村鑑三　39
　1−2　新渡戸稲造　45
　1−3　岩元禎　49
2. 三谷隆正による三師の思想の統合　51
おわりに—まとめにかえて　55

第３章　三谷隆正の遺著『幸福論』を読む
　—処女作『信仰の論理』との対照を中心に— …… 58
はじめに—問題の所在　58
1.「第一章　幸福論の歴史」を読む　62

1−1 要約 *62*
1−2 要約者・注 *74*
1−3 解題 *78*
2.「第二章 幸福とは何か」を読む *80*
2−1 要約 *80*
2−2 要約者・注 *88*
2−3 解題 *90*
3.「第三章 苦難と人生」を読む *92*
3−1 要約 *92*
3−2 要約者・注 *96*
3−3 解題 *99*
4.「第四章 新しき創造」を読む *102*
4−1 要約 *102*
4−2 要約者・注 *111*
4−3 解題 *115*
5.「第五章 不幸の原因」を読む *118*
5−1 要約 *118*
5−2 要約者・注 *124*
5−3 解題 *127*
6.「第六章 幸福の鍵」を読む *129*
6−1 要約 *129*
6−2 要約者・注 *137*
6−3 解題 *141*
おわりに―まとめにかえて *143*